

村づくりの先駆

せいせいぎかい

はんだちゅうぞう

済々義会と半田忠蔵

済々義会は、南檜岡の青年有志により、明治30（1897）年に結成され、学生や青年達の教育の普及発達を目的として、現在の生涯学習や青年会活動に通じる活動を行いました。

発起人は、半田忠蔵・桜田鐵之助・仙波廣治、八嶋竹治の4名。南檜岡小学校で行われた発会式は、30名あまりの会員と数十名に及ぶ聴衆がつめかけた熱意あふれるものであったと、会誌『済々義会々誌』が伝えています。

初代会長 半田忠蔵

この済々義会の発足に中心的な役割を果たしたのが、初代会長に選任された半田忠蔵でした。

半田忠蔵は、万延元（1860）年、佐竹藩士・半田茂助の長男として、久保田城下檜山（現在の秋田市）に生まれました。明治維新後、半田家は家禄を奉還したこともあり、明治7（1874）年にかつての知行地であった南檜岡に父と共に移住しました。

秋田師範学校を卒業し、明治14（1881）年、教員として、坊田小（後の南檜岡小）に赴任しました。

夜学を開き、学問の道を拓く

『南外村史』によると、明治29（1896）年の南檜岡村の就学率は、わずか36.3%（男60.5%、女6.4%）でした。貧窮や病気により学校に通えない人も多く、女子に至っては就学の必要性がほとんど認識されていない時代でした。

真に学びたいと思う人に学問の道を閉ざさせないために、人々の意識を変え、教育水準を向上させることが半田忠蔵の悲願だったはずです。半田忠蔵は、村の有力者を訪ねて青年教育の重要性を説き、同志を集めて語り合い、自宅では、昼間学校に通えない青年のために夜学会を開きました。

こうした活動が下地となり、半田忠蔵とその同志、夜学会の門下生が中心となって、済々義会が発足し、運営されました。

多くの人材を世に送る

残念ながら、済々義会の発足から2年後の明治32（1899）年8月、半田忠蔵は40歳の若さで病に倒れます。志半ばであったに違いありません。

「済々」は「多くて盛んなさま」という意味を持ちます。政治家として活躍した伊藤恭之介、仙北医院を開設した八嶋竹治、村の産業教育を起こした相馬市蔵、渡米し柔道を広めた伊藤徳五郎は、いずれも済々義会あるいは半田忠蔵の門下生でした。

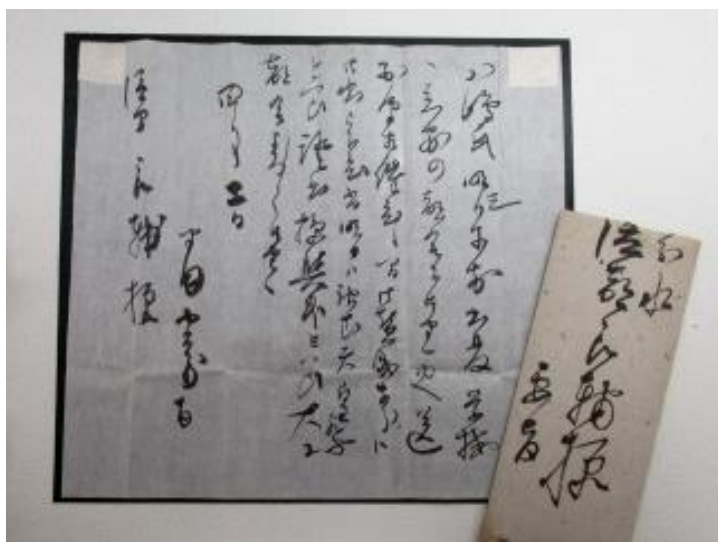
半田忠蔵の精神は、門下生や済々義会に引き継がれ、多くの有能な人材を輩出し、地域づくりの原動力となったのです。



済々義会々誌

会誌『済々義会々誌』を通じて、会員達はお互いの意見を発表しあった。その内容は、村の現状分析や、産業・村政に関する具体的な提言、教育論など多岐に及ぶ。文芸欄もあり、漢文や詩歌などを発表する場でもあった。

明治30年11月30日発行の第1号から大正3年1月7日発行の第52号まで確認されているが、途中8冊（20号・24号・33号・41号・45号・46号・47号・51号）は現在のところ確認されていない。（個人所蔵）



半田忠蔵の書簡

八嶋（竹治か？）が明日出発する際に学校へ立ち寄るため、送別会を開催することについて、渡部良輔(渡部良助)に宛てて書かれた書簡。（個人所蔵）



半田忠蔵への桜田鐵之助の弔辞

40歳の若さで病に倒れた半田忠蔵の葬儀には数百人の会葬者があった。弔辞を詠んだ桜田鐵之助は、済々義会の発起人のひとり。この時、半田忠蔵と共に南樺岡小の教員を務めていた。半田忠蔵の跡を継ぎ、済々義会2代目会長となった。（明治32年8月27日）（個人所蔵）

半田忠蔵の教育理念

済々義会々誌で発表された半田忠蔵の論説や随想から、その教育理念の一端を伺うことができる。意識して紹介する。



「青年の覚悟」（済々義会々誌第1号）

・欧米諸国に肩を並べるためには、政治家であっても、労働者であっても、一人ひとりが自分の考えをしっかりと持ち、学力と品性を備えていなければならない。

「随感随想」（済々義会々誌第1号）

・贅沢な酒や料理を並べ、美しい服装や立派な住居で、相手に対する信義を表しても、それは本当の交際ではない。信義と礼譲（礼儀をつくして謙虚な態度を示すこと）が大切である。

・自ら知りたいと思っていない者は、学校に入っても学問を進めることはできない。学問の喜びは、自分から求めて努力してこそ体験できる。

・お金があるからといって無理な遊学はしないほうが良い。都会の汚風に染まって、以前の素朴な気質を失い、講義を聞き流し、遊びに使った借金を仕送りで返済する。このような者は、分をわきまえて家業を助けるべきだ。

てつのすけ 桜田鐵之助と南檜岡倶楽部

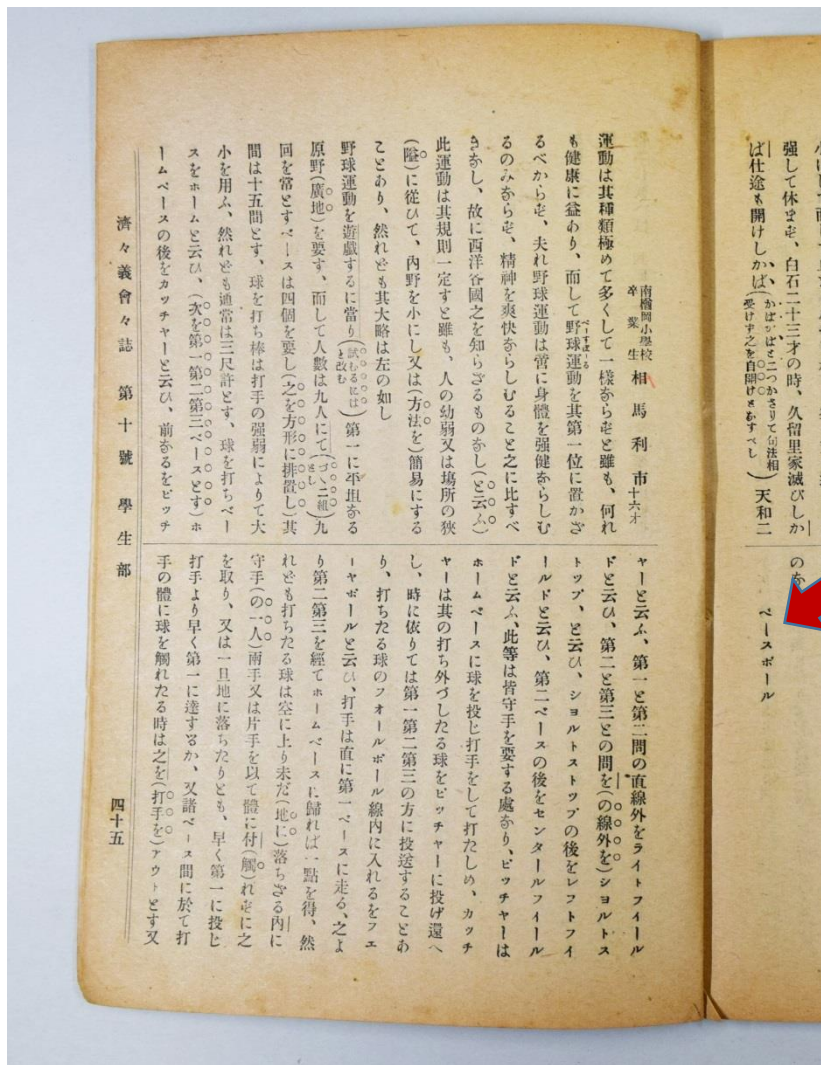


済々義会は「南檜岡倶楽部」を結成し、野球にも熱心に取り組んでいる。その中心が桜田鐵之助（明治4年～昭和15年）であった。

教員であった桜田鐵之助は、教育に野球を取り入れた秋田県における第一人者でもある。明治29年から明治34年まで南檜岡小に勤務し、野球を研究し指導した。

済々義会々誌 第10号

第10号には、当時16歳であった相馬利一が「ベースボール」を投稿し、野球の用語やルールを解説している。（明治32年5月31日）



済々義会々誌 第21号

5月15日に西部野球会が強首の大巻野で開催され、大澤・寺館・南檜岡・及位・北檜岡・峯吉川の6校が参加。「名誉のチャンピオンフラグは複も峯吉川の手に落ちぬ」とある。また、済々義会や南檜岡倶楽部の第一人者であった桜田鐵之助が第三中学（横手中）に異動となり、送別会が催された記事も見える。

（明治34年8月18日）

